

参考資料 1

第三次教育・文化ふくい創造会議（第2回会議） 議事録

- 日 時 平成21年1月30日（金） 13:30～16:00
 □会 場 福井県庁7階 特別会議室
 □出席者 赤土委員、伊藤委員、大廻委員、後藤委員、佐野委員、瀬尾委員、瀬川委員、祖田委員、竹川委員、長谷委員、西委員、広部委員、丸山委員（13名、五十音順）
 □事務局 伊藤教育庁企画幹、山内教育政策課長、持田文化課長、工藤文化課文化財保護室長、竹内文化課参事（文化振興）

教育政策課長

それでは、第三次の教育・文化ふくい創造会議の第2回会議を開催させていただきます。開会に当たりまして、西川知事から御挨拶を申し上げます。

西川知事

今日は御多忙の中、第三次の教育・文化ふくい創造会議の第2回会議に御出席をいただき、誠にありがとうございます。

さて、この年末年始にかけまして、福井県に関するさまざまなニュースなどがございました。1つは、昨年11月末に小学館DIMEトレンド大賞が発表されまして、福井県がその年のトレンドとなった話題・人・物などに贈られる特別賞を受賞したことがございます。昨年1年間を通じて、連続テレビ小説「ちりとてちん」の放送、オバマ大統領に対する小浜市の様々な応援活動、ペイリン副大統領候補の福井産の眼鏡、あるいは私どもが提唱しておりますふるさと納税の実行など、本県が多くの話題を集めたところであります。これらが受賞の理由でありました。

もう1つは先週発表されました教育関係の話題であります。既に全国学力テストにおいては福井県の子どもたちの学力が2年連続で全国最上位ということでありました。これもDIME特別賞の理由の1つになったのでありますが、本年度初めて実施をされました全国一斉の体力・運動能力テストにおいても、小学生が1位、中学生が2位というすばらしい成果を収めたところであります。福井県の子どもたちは、昔の言葉で言いますと文武両道といえますか、そういうことが伺われるということでもあります。

これらの成果は、県民の皆様が熱意を持って長年活動を積み重ねてきた結果であると思います。こういうものが一時的に終わることなく、目前の解決すべき課題を長い目で見ながら、さらにみんなが責任を負って次の活動につなげていくということにならなければならないと思っております。これは地域の新しい、広い意味の文化を創造するための動きでもありまして、私たちの県政テーマに掲げてございます県民の暮らしのクオリティー、質の向上ですね、そして県民一人ひとりが夢や希望を持つと、こういう生活を実現することにもつながると思います。

今回のテーマとして御議論をお願いしておりますのは文化です。文化は、芸術文化とか文化財だけの問題ではなく、県民の暮らしにつながる食生活、住環境、働き方、精神文化など幅広い概念を含んでいると思います。既に、21世紀は文化の時代であるとか、文化力の時代などと言われておりますが、経済不況が厳しい中、これまでの経済万能の考え方からの転換も迫られる大きな時期であるかと思っております。

議論を進めていただく際には、まず文化がこれからの時代にどのような意味合い、重要性を持つのか、これからの時代の基本的な方向はどうかといった基本に立ち返っていただきながら大いに論じていただきまして、そうした中で福井県の特質、特徴、課題を十分引き出していただければありがたいと思います。この文化という言葉を一応我々、事務的に使わせていただいております。

りますが、あまりこの言葉にとらわれていただくこともないかと思えます。そういうような方向だというふうに思っていたいただいてもよろしいかと思えますが、是非、そうした方向で御議論いただければありがたいと思えます。そして、学力、体力、文化は何力というのか、文化力とは言わないのかもしれませんが、そういう力も証明され、また発揮されればありがたいと思えますので、どうかよろしく願いをいたします。

簡単でございますが、冒頭のごあいさつとさせていただきます。

教育政策課長

会議に入ります前に、今回初めて出席される方もいらっしゃいますので、改めて皆様方の御紹介をさせていただきたいと思えます。

福井県立大学学長で創造会議の座長をお願いしております祖田座長です。雑誌「選択」の編集顧問で元福井県立大学教授の伊藤委員です。名城大学教授の丸山委員です。埼玉大学教授の後藤委員です。作家で、福井ふるさと大使の西委員です。丸岡町文化振興事業団事務局長の大廻委員です。構成作家の瀬川委員です。福井新聞社特別顧問で、座長代理をお願いしております佐野委員です。若狭ものづくり美学舎チーフ・ディレクターで、若狭町文化振興アドバイザーの長谷委員です。福井県文化協議会会長の竹川委員です。写真家の赤土委員です。元福井県教育委員で専業農家の瀬尾委員です。教育長の広部です。

それでは、ここからの議事進行につきましては、祖田座長をお願いしたいと思います。よろしく願います。

祖田座長

それでは、早速議事に入らせていただきたいと思います。

きょうは初めての委員さんもおいでいただきまして、大変遠方からおいでいただいている方もございます。お忙しい中、皆さん本当にありがとうございます。よろしく願います。

それでは、本日の第三次会議は「ふくい文化の振興」をテーマに検討を進めるということでございます。前回、第1回の会議が開かれましたが、事務局から論点および現状と課題を説明していただきまして、皆様方から大変貴重な意見をたくさん頂戴いたしました。

お手元の資料1にございますように、第1回会議におきまして私どもに示されました論点は3つございました。「ふくいの芸術文化の振興」、「ふくいの文化財の保存と活用」、「ふくいの地域文化の向上と継承」の3つでございました。また、第1回会議の冒頭の知事さんのごあいさつの中で、「文化の基本に立ち至って、どのように文化の問題を考えたらいいのかというベースになる部分をいま一度整理してもらって、その上で各分野の具体論を検討していただきたい」と、こういった旨の発言がございました。

そこで本日は、「文化の意義と文化政策の基本的方向性」を新たな論点に加えまして、大きく4つの論点について皆様から自由な御意見をお伺いしたいと思っております。

それでは、資料1として前回の意見・提案要旨を整理したものが配付されておりますので、事務局の方から簡潔に報告をしていただきたいと思います。よろしく願います。

伊藤企画幹

それでは、ただ今、座長からお話のありました資料1、A4の3枚ぐらいのペーパーでございますが、御覧いただきたいと思います。

< 資料1に基づき説明 >

祖田座長

ありがとうございました。

今、御紹介いただきましたように大変広範な、かつ御経験を踏まえた貴重な御意見をたくさん頂戴しております。今回は、前回の御意見、御提案も踏まえまして意見交換を進めさせていただきますと思えます。

先ほど申しました4つの論点につきましておよそ1論点30分ぐらいずつに区切りまして御意

見を伺ってまいりたいと思います。また、事務局から提示のありました論点以外にもお気づきの点がございましたら、具体的に検討すべき視点とかいうような点、いろいろな観点から何でも御提示くだされば幸いです。各委員におかれましては、これまでの御経験を踏まえながら、できるだけ具体的な御意見をいただければと思っております。

それでは、最初の論点でございますが、文化の意義と文化政策の基本的方向性について御意見をお伺いしたいと思います。これは、先ほど申しましたように、今後のテーマを議論する上でのベースとなる大事な部分と言えるかと思っております。

最初に、今日初めて御参加いただきました委員から意見を頂戴したいと思います。よろしゅうございますか。それでは指名をさせていただきますが、丸山委員、お願いしたいと思います。

丸山委員

実は、国交省の方で歴史まちづくりということで紹介されるみたいなんですけども、4月20日に新聞報道で彦根と金沢と萩と高山と、最後が非常におもしろいんですけども亀山市、シャープの液晶で有名な亀山ですけど、そこが歴史まちづくり法の最初の指定になります。

私、文化財に少しかかわっておりまして、地域の文化をどう継承するか、あるいは、地方だから文化的なものがないとかあるとかいうのではなくて、国の政策としてこれは非常に画期的な方向転換なんですね。国交省が、文化財の整備に対してお金を出すというようなことが、この福井なんか今準備されているのかもしれないけれども、文化的なものだけではなくソフトの面にもかかわって、こういうものがまちづくりに関連してくるのではないかということで、是非進めていただきたいなと思っているのですが、今日の話でちょっと問題になったのは、国の文化財指定がないとこの法律をうまく使えないところがある。

先ほどちらっと見せていただきますと、私も朝倉はよく知っておりますけれども、結構、福井は、国の指定の史跡であるとか名所とかがあって、そういうものを核に地域の文化をうまくまちづくりに使えるような方向性が出てきたので、是非そういうことをやっていただきたいなと思っております。

会議の前に亀山の話をしていたんですが、亀山市というのは街道沿いに文化財が少しあって、それをつなげるような形で国の方に提言しています。それぞれの地域特性を生かした文化を掘り出すということも重要なこれからの話になってくると思いますので、できればこういう機会に、是非うまく利用していただけたらなと思います。

もう1つは、基本的に郷土愛というんですか、愛着を持っているということが大事だと考えています。その地域にプライドが子どもたちも含めて持てるかどうかというのが大きなものだと思います。

昔イギリスにいたときに「ロンドンズ・プライド」という展覧会がありまして、それは何かというと、具体的に言うとロンドンの緑地の話なんですね。ロンドンが培ってきたそういう文化的な緑地の展覧会をやることによって知らしめているみたいなのがありまして、だから、福井のプライドは何なのかみたいなのが、結果的には先ほど言ったようなまちづくりなんかにも関連してくるんじゃないかと思っています。

祖田座長

ありがとうございました。

それでは、続いて後藤委員、お願いできますでしょうか。

後藤委員

文化の意義と文化政策の基本的方向性というのが最初に議論すべき論点ということですか。

祖田座長

はい、そうですね。最初の論点として。

福井の芸術文化の振興、それから文化財の保存と活用、福井の地域文化の向上と継承というのを、前回はこれでやっていたんですけども、もう1つベースになる議論をきょう最初に、文化の意義と文化政策の基本的方向性ということで、今30分ほど御意見をいただこうと思います。

後藤委員

私、先回来られなかったんですけれども、記録を見せていただいて、いわゆる文化政策というのは文化財中心に立てられたのかなという気がちょっとしてまして、今現在、文化庁がやっている政策でも、1950年に日本は文化財保護法ができていますから、それで文化財政策として教育委員会管轄で各都道府県もやってきていたんですけれども、80年代の後半からいわゆる現代アートへの支援ということで、これはプロのアーティストを支援して現代アートを活性化していくというか、そういう政策が始まっていて、文化庁の方でも芸術文化支援というのは現代アートの支援を意味していると思うんですけど、それについてあまり触れられていないなという気がしたんですよね。

やはり文化政策というのを議論する場合には、市民の文化活動を支援する、あるいは今までつくられてきた文化財を保護し活用するというのも大事なんですけども、現在において創造されている文化、それも市民とかアマチュアというのももちろん大事ですけども、プロフェSSIONナルのアート活動とか現代アートを支援していくというのも文化政策の今日では非常に大きな柱になっていて、ヨーロッパとかアメリカではむしろそっちに重きを置いて展開されてきたというふうなことがありますので、それも必要なのではないかなと思って先回の議事録を読ませていただきました。ですから、現代アートへの支援をどうするかといったようなことも文化政策の基本的方向性としてはないとおかしいかなと思います。

もちろん文化財というのも大事で、それは過去につくられた文化遺産をどういうふうに今日的に活用していくか、あるいは、それが先ほど丸山先生の方から紹介がありましたように、今は文化庁と国交省が組んで、今年の5月26日に法案が通ってまちづくり新法というのができましたけれども、都市景観といったような都市計画と今度は結びついていくということで、国交省とも連携しているわけですけど、そういう都市政策としての文化ということもやはり考えないといけないというのが2番目です。

それから、もう1つは、文化が非常に産業化してきているというのが1990年代以降の流れでして、これはイギリスのブレア首相のときに「クリエイティブ・インダストリー」ということをイギリスが打ち出して、これが世界の大きな流れになっています。日本でもコンテンツ産業という言い方をしていますけれども、ゲームであるとか、アニメーションであるとか、あるいは音楽、それからミュージアムそのものも「クリエイティブ・インダストリー」だと言われていますけど、いわゆる文化が産業化していったら経済とも結びついていく。そこに大きくかかわってくるのが著作権であったり、それから知財ビジネスと言われているようなものですけども、そういうところへの目配りという点があまり先回触れられていないのかなというような気がしましたので、少し大きく文化政策と文化の意義の枠組みを考え直した方がいいという気がいたします。

祖田座長

ありがとうございます。次に赤土委員。お願いいたします。

赤土委員

私、写真家ということになっているのですが、どちらかというとなら建築の方を主にやっております、建築ほどおもしろい文化性のあるものはないと思っています。

福井の文化というのは、この前ちょっと資料を見せていただいて、団体でのいろんな活動については書いてありましたが、それ以外に「北荘・北美」がやっていたころ、そのころは小野忠弘とか松崎真一という作家たちがすごく活躍していた時代ですね。そのときは福井というのは、日本の中で京都、熊本、そして福井と言われるぐらい現代美術等に関しましてはやはり勃興していた。それが今なぜかものすごく静かになってしまったということがございます。

その中で、やはり福井では文化は育たない、作家は育たないと昔から言われているんですが、それはなぜかと言いますと、福井の文化というのは、何か作品をつくらうとかいろんなことをやっても、皆足を引っ張られてしまうとか、そういう問題が多い。福井は針の中に糸を通すようなことしかやっていない。もちろんそういう地域というのはありまして、その文化性というのは豊かじゃない。では、そこに住む人たちをいかにして豊かな感性を持たせるようなものにして

いくかということに対して、提案がいるのかなと思っています。

私が今やっております建築で、日本全国で幼稚園、保育園等をたくさんつくっています。それはなぜかといいますと、子どもたちは5歳ぐらいまでの間に感性は磨き終わると言われるんですね。ですから、それまでの間に本当にいい空間の中で育てるということをやらないとこれはできない。いい文化性を持った子どもたちというのはできないんじゃないか。今、いい感性のある町があるのかということになると、なかなかそれは見えてこない。例えば、金沢の町並みの中ですと意外とそういったのが育ちやすいんですが、福井のように2回も震災と震災の中でいい町が消えてしまっている部分というのは、なかなかそれは育てにくいんじゃないかなと思っています。

ざっと今こんな話をしながら、例えば町がよくなる時というのはどんなことをやっているかという、例えば海外だったらビルバオというスペインの町があるんですね。そこで建築家が現代美術館をついたら、その美術館を見るために世界中から人が集まってきている。人を集めるためには、そういう町をつくるというのも1つの手かなとも思っています。

それと、子どもたちにいろんな感性を磨かせるといいますか、子どもたちが出ていく場をつくっていくために、私、国民文化祭のときに現代美術を責任持ってやらせていただきました。三国町でやったんですが、その後、「現代アートビエンナーレ」というのをやりまして、日本全国からいろんな作家の人たちに集まってもらってものをつくれるようなことをやりたいということで、今現在は福井、石川、富山の高校生を対象にしたものを行っています。その中でいい作品というのはすごくたくさん出ていまして、その人たちをいかにすくい上げるかといいますか、拾い上げて外へ出すことができるかという活動を今やっています。そういうことなんかもやはり福井の文化を持ち上げていくためには必要かなと思っています。

それと、いい町をつくるためには、福井の建築をも含めて、その中で子どもたちにも育ててもらいたいということを感じていますので、またいろいろと私も活躍をしながら、いろいろと活動しながら育てていきたいと思えます。

福井は意外と小さな町ですが、福井市にいて、東京にいる人たちよりは何でもできると思っています。都会というのはいろんなものが周りにたくさんあるんですけども、一人ひとりが何をやっているかという、すごく狭いところで物を考えている人たちがたくさんいて、何も活動できない人たちというのがすごく多い。人数が多いから多いように見えるんですけども、福井は小さい町の中で本当に活動している人がたくさんいますので、これを外に向かって発信していくことができるんじゃないかなと。知的産業というか、知的なもの、文化的なものを福井へ持ってくることで、福井の町の活性化というのはまだまだ進んでいくような気がしているんですけども。

祖田座長

ありがとうございました。次に、瀬川委員、お願いします。

瀬川委員

文化の意義と言われると私もよく分からないんですけど、行政が文化をお膳立てできるものではないと思うんですね。基本的に文化というのは、表現したいという欲求というのは個人的に出てくるものですし、それを行政でこういう場がありますからどうぞと言われても、まずそこから始めるのは無理だと思うんです。だけど、何か表現したい、やりたいということが出てきたときに、前回会議で御意見が出たように、例えば24時間使える拠点があるとか、安く使える拠点があるとかっていうかたちで、文化政策がそれを後押ししてくれるという意義というか方法はあると思うんです。

もう1つは、そういう文化活動をしている人というのもどこかで何か文化に触れてやりたいと思った原点があると思うんです。その原点になるような出会いの場というか、そういう場所をつくるのはすごく大切だし、それは行政がやっていけるようなことだし、経済的な裏づけも要ることだと思うんですね。何か表現している人の表現が、それをぐっと感じる人がのところへちゃんと届くことができるような、それを文化政策というんじゃないかなと。次の人へ伝わっていくことが文化なんじゃないかなと私は何となく思っています。

私自身はアマチュアで芝居にかかわっているんですけど、福井は東京なんかには比べると稽古する場所とか劇場を押さえるとか、そういう面ではものすごく恵まれているんですよ。1年前に劇場を押さえなきゃならないとかいうことも全くないし、個人が持っているような小屋を貸してもらい、そこで練習もできるというようなことも結構あるので、東京なんかには比べるとそういう点ではじっくり作品をつくるという意味では非常に恵まれているなどと思います。

ただ、出会いの動きということに関して言うと、どこに見に行っても同じ顔が見に来ていて、新しい出会いがあんまりないとか、同じ人が別の劇団を見に行く、こっちの人がここで公演するときはほかの劇団の人がこれを見に行くみたいな感じで、広がっていかないとか、そういうもどかしさみたいなものはありますね。だから、どう広げていくか、伝えたい人のところへどう伝えていくかというのがすごく難しいなどと思っています。

祖田座長

ありがとうございました。

今4人の方から御意見を頂戴しましたが、ほかの方、前回いろいろ御意見を頂戴しましたが、今日の文化の意義と文化政策の基本的方向というベースになる部分につきまして御意見をいただけたと思います、いかがでしょう。

長谷委員

資料2ですね。前回論議をお願いしまして、福井県の芸術文化分野における歴史的観点から見た特徴的事項ってえらく難しい題名がついていますが、まとめていただきました。これ、大変ありがたいなと思って読ませていただいたんですが、これはあくまで組織活動に着目した内容ということで整理いただいたんですが、今赤土委員からもお話があったように、これに個人を加えるとか、よりきめ細かさを加えるとか、それから、地域的なことでも奥越や若狭での活動がちょっと落ちているかなというような思いもありますから、そういう点も足していただくと、なかなかいいものをつくっていただけたなと思うんですね。

文化政策というのを考えていったときに、過去のこういう現代アートに至る福井県の特徴的な取り組みというのを押さえて、そして、歴史を押さえて現代というところへつないでくるという中で、やはり福井県の特質とか、歴史的な歩みというものを大事にしながら次の文化政策の柱を立てていくというのが常道でないか。いわゆる抽象的なことを言ってもしょうがないので、福井県の今まで歩んできた書なら書の道、音楽なら音楽で、福井県としてつくってきた歴史なりをかつちりと押さえながら次に開かれる政策を打ち立てるとというのが、いわゆる文化政策の基本的方向性かなと思います。やはりローカルなあだ花があってはいけませんけれども、優れた地方文化が普遍的文化につながるという観点から、福井の特質をきちっと押さえて次の政策をみんなで練り上げていくというのがいい。そういう点で、この資料2は大変貴重になってくるんじゃないかな。よりきめ細かさがあるといいなこと、ありがたいなと思って読ませていただきました。

伊藤委員

先ほど話をいただいた4人の委員の方々の御意見をお聞きしまして、先回、第1回のとことやや異なるとか新しい点は、一流のパフォーマンスができる文化がやはりなきゃいかんということです。先ほどの、ちょっと名前は忘れちゃったけども、建築にしろ、現代アートにしましても、そのことの重要性、むしろ前回の場合には文化の土壌というものがいかにあるべきか、それを肥沃土に培うのはどうしたらいいかという意見が多かったと思います。やはりその上に花が咲かねばならないというんですね。私も、なるほどそのとおりだと思ったんですね。

しかし、ただ、土壌があるから花が咲くということもありますし、花が咲けば、その刺激を受けて土壌が肥えてくるということもあろうかと思うんですね。ですから、それは強く関連するものでありますから、この会議で、あるいは行政、教育の場でお考えいただくときも、実際には土壌を培うという地味なものよりも、ぱっと出た美しい花の方が役に立つことあろうかと思えますから、きょう新しく出たそのところをどうするか、それはうんとお金を出して振興するとか、賞を出すとか色々あろうかと思えますけども、それだけではどうにもなりませんし、優

秀な人材をいかに育てるかというようなところに少しいろいろなお考えを集中していただけたらと思います。

赤土委員

これを見せていただいて、茶道とか華道とか、そういうような伝統的なものは取り上げていないのかなと思ひまして、もし今後調べられるならその辺もリストに上げたらと思います。

私、造園をやっております、庭と茶道、そういうものが非常に関連していて、今おっしゃったように人的なものも非常に重要なことでありますが、そういう活動が多分福井で盛んにされているとは思っているんですけども、それ以外にもひょっとしたら出てくるのかもしれないけども、人的なものでの活動をされているものがこれで終わったと考えるのかどうか、それ以外にあるのかどうかちょっとわかりませんが、ちょうど書道というのがありますので、道がつかえますけど、教えていただければと思うんですけど。

西委員

福井は、茶道家はたくさんいらっしゃると思うんですけど、それはまとめて探して、何人お免状を持った先生がいらっしゃるというのが派閥とかでわかると思うんですけど。

竹川委員

今、華道・茶道の話が出ていましたが、私は福井県の文化協議会にいて、文化協議会には6つの部門があって、美術部門、音楽部門、それから文学ですね。それから芸能—民謡とか洋舞、日本舞踊。それから各市町村の文化協議会の部門。それから、生活教養といわれる茶道とかお花、香道ですね。そういう部門が6つあるんですが、その会員数の比率では、お花、お茶の会員が非常に多いです。極めて多いです。実際には、会員というのは会費を払っている人のことで、実際に活動している数となると、その数だけでは測り知れないというのが実情であります。

それから、文化財の話もちょっと聞こえましたが、この会議でその範囲を全部に広げてするのか、ある程度文化芸術にするのか、文化面にするのか、ある程度絞っていかないと、あっち行ったりこっち行ったり、意見を申し上げてもそこに到達できなかつたり。広く浅くか、割りに狭めて深く行くのか、具体策を練っていくのか、やはり方向付けはある程度決めておいた方が議論はしやすいのではないかと考えて持っています。

祖田座長

さっきの第1の論点は、文化のベースになるところで非常に広く、ベースというだけに非常に広がっておりますけども、この辺はどうなっていくのかちょっと私も今のところ検討がつかいませんけども、何か柱を限定するかどうかというのが…。

丸山委員

なぜお茶というのを言ったかといいますと、それは建築とか庭とか非常に空間文化の方に関連するんですね。もちろん演劇もそうですけれども、まちづくりの中で関連してくる芸術文化というのがかなり錯綜しているというんですか、非常にややこしいことになって、地域によってちょっと違うと思うんですね。だから、フレキシビリティというんですか、情報としてはあった方がいいんじゃないかなと私は思っているんです。

だから、それについて今回議論するというわけではなくて、福井で様々な活動をされている方がいることを知っておくことがやはり要るんじゃないかなと思っております、広く浅くという意味ではなくて、例えばある地域のまちおこしでやった場合には、そういう情報が地域的に集まりますよね。やはりそういうベースがあった方が、先ほども言いましたけども、歴まち法なんかについてはそういう人たちが担い手となって、また実際に物をつくったり、あるいは活動してもらってというのがあるんですね。だから、今度は違う分野の人のネットワークがその地域にできる可能性もあるとは思っているんですけども。ぱっと見てお茶とお花がないと思っただけです。

西委員

いや、それに賛成というか、御存じないと思うんですけど、私、和菓子の物語を書いてまして、当然お茶が出てくるというか、お茶がベースになると思われるんですね。

今、女性たちでお茶を始める人が全国ですごく多いんですよ、実際に。それで、福井も何人か家元さんにお会いしたりとかお話を聞いても、実際お茶の世界って、さっきおっしゃった建物もあれば庭もある。その中にこういう絵をかける、お花をかける。それにすべて理由があるんですけど、その理由をちゃんと学ばないと文化レベルが低くなるという状況はあるんです。お菓子1つにしても、お正月の初釜のときに七花びらもちを食べるんですけども、それをなぜ食べるかというところに文化がまた出てくるんですけど、その意味合いとかが薄くなっていてわからない。これはお正月に食べる物というような。

だから、その辺なんかも踏まえると、茶道1つ取り上げるだけでも、子どもたちに例えば小学校でお茶の時間が1年に1回、2回あってもいいと思うんです。日本人だから。そのときに、できるだけ立派な先生にできるだけそういう人のお茶とか、そこは前も話になりました本物志向なんですけど、本物に触れる。

赤土委員

方向性ですね。

西委員

そうです。お茶わん一つにしても、福井には越前焼という大きな焼き物があるわけですから。そういうものとか全部文化に広がっていく要素がある。認識のつくり方だけだと思います。与え方。

赤土委員

お茶、お花というのは、福井の場合は嫁に行く前には必ずやっていくというんだったんですね。特に日本人はそうなんですけども、特に福井はそれが強くて、嫁に行くときは、じゃ、着物をいくつ持っていくかということ、たんす何さおの中に入れていくかぐらいやっていた時代もありました。

今の人たちというのは意外とそれが少なくなっているんですが、全く興味がないかということもそういうことなく、いろんなところで、ちょっとやってみたいなという話なんかもよく聞くんですね。ですから、それが平常心でやれるような、文化としてお茶やお花をやるような場をつくらせてあげることというのが私は一番必要だと思っています。

それが福井の全体の文化を上げていく、感性を磨かせていくということが大切かなというふうに思うので、有名人がいるとかいないとかの問題じゃなくて、それを平常心でやる人をいかにたくさんつくるかということが必要かなと私は思っています。

佐野委員

今、お茶、茶道文化が現在どうなっているのかという流れのお話になっているんですが、福井県内では大体お茶の作法というか、そんなのをやるのは14流派ぐらいありまして、全国どこでもやるんでしょうけど、初釜をやったり、裏千家なんか永平寺で毎年茶会をやったりしてしまし、朝倉遺跡と結びつけた茶会とか、そんなのがいろいろそれぞれの会派にはある。

西委員

丸岡城もお茶室をつくってあるんだよね。

佐野委員

作法関係は和光会でまとまっています。福井県の茶道連盟和光会で競い合っているんですけど、だから作法はそういうところで学んで、もう1つは茶の文化ですね。これは茶の湯同好会というのがあるんですよ。これは各流派ごちゃ混ぜですね。皆さん個人で参加されています。今230人いまして、毎年陶芸村で初釜をやったり、月見茶会をやったり、さつきあげの茶会とか、

いろんな茶会を4、5回やっているんですよ。

と同時に、正月のときには岡倉天心の茶の本とか、天心をメインテーマに天心の思想も学びながら、京都の中村祥二さんは伝統文化芸術協会の会長さんをしていますけれども、先生を中心にした人脈で、ユー・アイふくいなどでいろんな茶道や建築家の方のお話とか、熊倉功夫さんとか、いろんな方が講演しているんです。団体として、有名な茶室、大徳寺の孤篷庵とか如庵とかいろいろ廻っていますね。

そういう意味で、二本立てでずっと活動してまして、結構盛り上がっている。

西委員

それには、一般の人とか若い人は参加できるんですか。

佐野委員

参加できるんですよ、一般の人も。

西委員

していますか。

佐野委員

はい、しています。

西委員

東京で銀茶会というお茶会が年に1回、週末にあるんですけど、メインストリートから細い路地まで、各派の青年部から本部からいくつも出る。だから、表千家だけでも4、5か所出るんですけども、町じゅう全体がお茶会場で、お茶を知ってもらおうということで無料なんです。だから、若い人たちもお年寄りの方も着物を着て、着物の文化がそこに入ってくるんですけど、町全体がその日はお茶の日になる。僕なんか、それにいつも参加させてもらっているんですけども、例えば今おっしゃったようにやっていたら、府県がどういうバックアップをするのかわかりませんが、子どもたちも参加できるようにするのもおもしろいと思うし、福井の町の真ん中でやるのもいいと思うんですけどね。

佐野委員

先ほどから議論に出ていますように、お茶の文化って総合文化的な日本のエキスが全部入っているような、焼き物から建築から全部。

西委員

文化という意味では全部入ってきちゃうと思います。

佐野委員

はい。そういう意味では大事な部門だと思います。

西委員

あと大津でしたっけ、佐川急便が京焼きの茶室をつくったら、全国からバスツアーでその茶室を借りにくる。それは商売に通じているんでしょうけども、そういう形のものがあってもおもしろい。

佐野委員

今、各論みたいところでちょっと話が進んでいるんですが、座長の提起されたのは文化のいわゆる基本の意義と方向性というので…。ちょっと理念的なことで申し上げて抽象的になるかもしれないけども。

私、最近つくづく思うのは、文化というのがものすごくリアリティーを持って大事だなと思う

ようになったのは、去年のサブプライムローンの破綻からリーマンショックになって、金融危機が全国へ広がっていった、自由主義や市場原理主義でやってきたのが、最終的にはもうアメリカが国有化してやっていくような、自由主義とギャップするようなところまで来てしまっ、金融経済そのものが行き詰って、それが世界各地に広がっている。

去年、派遣村が出たでしょ。これ、すごいなと思ったのは、わずか2カ月ぐらいであのショックがぱっと伝わって、もう路頭に迷う人がぼんと登場していると。その文脈の速度のすごさね。だから、人・物・金と言いますが、金・物・人という形で伝わってきて、金が破綻したら、今度は各社の株が下がって、経営が難しくなってもう不景気だと。金から物に行き、すぐ人が切られるという。その速度の速さというか、これがグローバリズムだという感じを強く感じた。そういうときに何が力になるかといったら、やはり個人それぞれ人間の力というか、そういうものがものすごく大事になってきて、今引きこもりみたいだんだん縮こまって委縮していく、成長率もマイナス成長だと言われている中で、文化というのがものすごく大事になってきている。

やはり、地方には豊かさがありますから、蓄積してきたものをベースにしながら、今、何をやってもマイナス思考という中で元気の出るといったら文化しかないんじゃないかな、逆に言う。

だから、どうせつらい時代だから我慢してみんなで協力してやっていかなければいけない中で、楽しくしようやと、楽しいところでみんな元気づけようと。そのためにはいろんな表現活動が活発になって、みんなが心打たれれば、あしたの励みになっていくというような大きな文脈というか、ダイナミックな動きが福井で起こっていく、それぞれの地域で起こっていくということが、協働ということも大事にしながら人間関係をうまく築き上げていくというのが大事だ。やはりそういう力を県が、知事が、また教育長をはじめ、そういうところでリーダーシップをとってもらう。

それとあわせて、文化予算なんていうのはなかなか厳しいと思うんですね。だから、金はできる限り努力していろんな形でやってほしいと思いますけれども、やはりそういう観点でもう一度再構築していく、そういうことが大事なのかな。今なぜ文化活動、今の文化の必要性の方向性というのはやはり人・物・金。今度は人・事・物・金というか、事と物と、何かをつくり起こしていく、その事という部分で文化運動というのが大事なんじゃないかなと。

それで、はっきり言えば、お金というのはジャンカーという言葉がありますけれども、要するにカスみたいなもんですよね。今、請求書を証券にするわけですから、要するに債権というのは請求書でしょ。はっきり言えば、それをまとめて債権にして市場に出すというんですよ。無茶苦茶ですよ。だからジャンクなんですよ、はっきり言って。どこでもアメリカンドリームみたいに夢を見させて、金を払える人に家建てた、貸し付けた、それを債権にしてばらまいたんですから。ジャンカーと、ある意味そんなもんです。

だから、そういう状況。金は大事なんですけど、金が実態から離れてしまっている。だから、もう一度質実な生活をベースにして文化活動というのはできるんだなというのが私の意見です。

祖田座長

ありがとうございます。

今、第1の論点につきまして、本当にいろいろな御意見を出していただきました。現代アートの話から始まりまして、いろいろと御意見をお伺いする中で、これまでの歴史あるいは過去と、現代とといいますか将来とといいますか、こういった間の問題。それから、いろんな活動領域—6つというふうに先ほど竹川委員がおっしゃったと思いますが、いろんな領域がございまして、これも広げ過ぎると切りがないということでございましたけれども、広く活動の分野があるというふうなこと。それから、若者も含む、子どもたちも含む、場所、出会いをするということの中で、あるいはまちづくりというような中で、場の設定とといいますか、文化が育つ場所、こういうようなことが問題になったかと思えます。

その中で、柱立てをあまり多くすると具合が悪いという御意見もございましたし、また広げるだけ広げていいんじゃないかという意見もございましたが、一応領域としてはできるだけ広く拾い上げていく方がいいんじゃないかなと座長としては思っております。

ただ、柱立てがどういうふうに整理できるかということにつきましては、現在大きな柱の立て方は4つのくくりになっているわけですので、これ以外に何か柱という観点から別の整

理の仕方があるかどうかということについては、また事務局の方とも相談させていただきまして、今後も考えていきたいと思います。

長谷委員

柱立てで、先ほど、華道とか書道の話が出たんですけど、資料2のところには書道と入れたから華道、茶道の話が出てきたんですね。この場合、芸術文化分野では書と書いていた方がいいですね。茶道とか華道とかの道というのは、やはり1つの決まっていることを繰り返して身につける道ですから、多分に創造性が弱い面がある。生活文化ですからね。だから、そういう芸術文化、生活文化あるいは伝統文化という3つをもうちょっと整理しながら議論しないと、書の話をしてアートの話をしているときに茶道が入ってくるわけですけども、当然2つは関連するんですが、やや混乱していくように思うので…。ただその6領域のジャンルだけで分けるんじゃなくて、少しそういう芸術文化や生活文化や伝統文化にしても、この委員でもって論じ合ったほうがいいかなという気はしないでもないです。

祖田座長

ありがとうございます。それでは、次の論点に移らせていただければと思います。既に先ほどの議論の中で出ていたようにも思いますが、「芸術文化の振興」という論点についてご協議いただきたいと思います。

前回の会議で長谷委員から、「美術、書道、音楽など芸術文化分野における福井県独自の歴史・特徴について調べて提示してほしい」という旨のご提案がありました。

この点につきまして、先ほどから既に話題になっておりますが、資料が提出されておりますので、説明を受けた上で議論に入りたいと思います。よろしくお願いいたします。

文化課長

それでは、お手元の資料に従い、「福井県の芸術文化分野における歴史的観点から見た特徴的な事項」をご説明します。資料2をご覧ください。

< 資料2に基づき説明 >

祖田座長

ありがとうございました。

それでは、ただいま御説明いただきました資料2でございましたが、福井県の文化活動の過去、現在のようなものの概要をお知りいただいたかと思いますが、この芸術文化の振興という第2の論点に関しまして、御自由にどうぞ。

佐野委員

資料について補足ですが、映画部門がちょっと抜けているんですが。文協に入っていないから外れていると思うんですが、映画サークル協議会が戦後できて、唯一全国に残っているのは福井と広島だけなんです。民衆映画上映運動みたいなのが戦後ずっと続いていますから…。3、4年前に組織改編して新しいかたちで若い人に受け継がれて、従来のスタイルとちょっと変わったんですが、それを。

もう1つは、いわゆる商業映画、シネコンの映画館に乗らない名画座みたいなかたちでニューキネマなんていう文化団体とか映画グループがありまして、年3、4回ぐらいいい映画をやっていますし、開発途上国のイランの映画とかイラクの映画とかやっています。

そういう意味では映画というのも大事に位置づけておいた方がいいのではないかな。

西委員

福井出身の映画監督も多いですからね。

佐野委員

ああ、そうですね。吉田喜重さんやら、何人か。

西委員

4、5人はいらっしゃる。

長谷委員

この本県ゆかりの文学者等にちなんだ取組みなんだけども、文学者ではありませんけど、若狭町ではこのことば文学賞、佐久間勉の遺書を基に7回目になりまして、800から1,000点、全国公募ですね。それから、今年から若狭町認知症一行詩コンクールも全国公募されています。それから、蟹と水仙だったかな、越前町の。何かちょっと落ちているような気がしますね。文学でも山本和夫と若狭文学会とか、この詩とか俳句でない本格的な小説とかですね、そちらの部門が。

それから、ここの領域ではないんですが、伝統文化の方も現在取り組んでおられるようなことが提起できるともっと明解になるかなと思うんですけど、さっき丸山委員さんが言われたんですけども、若狭町と小浜市が、今年度、文化庁の文化財総合的把握モデル事業の委託先20のうちの1つに選ばれて取り組んでいますね。だから、そういうことが明らかになった方がみんな議論がしやすい、何をやっとなるかが見えてくるというような気がします。

丸山委員

また分野を増やすようなことで申しわけない。お祭りというのはどう考えられるんですか。お祭りというのは、僕は非常に生活文化とか。

長谷委員

いや、伝統文化の民俗芸能の中に。

丸山委員

またリストは出てくると。

というのは、例えば名古屋ど真ん中祭りとか、若者がそういうのを名古屋でやっていますし、よさこいとかああいうようなもの、新たな演劇になるのかわかりませんが、伝統でもなくて、そういうような動きもあるのかなのか。

佐野委員

ただ、丸山委員さん、その民俗芸能というのが言いようによっては昔のまま引き継ぐんじゃなくて、昔の踊りを現代化したらもう民俗芸能だという言い方がありますね。

丸山委員

そうですね。

佐野委員

だから、よさこいなんかも民俗芸能なんかで語っていても悪くはない。

広部委員

祭りは、福井においては特に若狭地区の方ですね。敦賀から向こうの方で非常に各地区地区によって、正月からのいろんな伝統のお祭り、それから子どもたちの地蔵盆であるところがたくさん行われております。

それで、いわゆる悉皆調査といいますか、すべて拾い上げてピックアップする、それを今始めようと思っております。

丸山委員

というのは、歴まち法の関係で、地域の文化や祭りを含めるという方向にありますので、非常に重要なことかなと思います。

西委員

じゃ、事前にもう1つ増やして。

僕がかかわっている漫画なんていうのも大きな文化。日本の、世界最大の、今考えたら金を取れる文化の1つになっていると思うし、福井からも高名な漫画家も何人か。何人もいないかな、2人はいるし。漫画の世界に入ってきているのも何人かいて、まだ育ち切らないのもいっぱいいるんですけど。

実際、県の文化課の仕事で年に何回か高校に指導に行くんですが、文学のこととか、写真のこととか、芝居のこととか。そうすると、その中でやはり漫画サークル、漫画部みたいな子たちが元気いいんですよ。イラストに入ったりとかっていうそっちのほうが非常に人数が多くて、そっちの子たちが教えてくれというのがあるので、昔は漫画なんか読んだりするとバカになるとか言いましたけど、今は漫画を描くと金持ちになると認められる世界だと言っていますから。

もし可能であれば、各高校、中学校とかにサークルがある程度のことだと思うんです。サークル、部活までにさせてくれているかどうかわかりませんが。ありますか、そういう数は。

広部委員

調べたいと思います。

西委員

県内でそういうコンクールはないと思うんですけども、高知のまんが甲子園みたいなのがありますが、あとは大手出版社とかありますけど、そういうのをちょっと調べていただくと非常に参考になります。

祖田座長

大変広がりますけども、できるだけ。

長谷委員

工芸もある。工芸。

祖田座長

いろいろありますね。確かにお祭りなんかは本当に大事な。ここにあります領域と、それから整理の仕方というのをやはりもう一度検討を要するような気がいたしますので。漫画も含めまして。

西委員

だから、この資料自体が厚くなることはいいことだと思うんです。

祖田座長

いろいろ活動があるということになりますので、できるだけ広く。各市町村のいろんな伝統行事とか、文化活動といいますか、そういうものもかなり市町ごとにあると思います。そういうものを集めるとまたいろいろ入ってくるんじゃないかという気もいたします。資料の問題もございしますが、これらの芸術文化のより一層の振興ということにつきまして意見を願います。

後藤委員

委員の皆さんは福井県の方が多くて、私は埼玉から来ているので。私、いろんな県とかのこういう会議の委員をさせていただいたりしているんですけども、こういうかたちで県民の文化活動を全面的に押し出して議論したということがなくて、むしろ文化政策の会議というと、文化政策

をどうしましょうかということで、もう少しプロフェッショナルな集積を図るとか、プロの人たちの活動を支援するとか、あるいは美術館の発信力をどう高めていくとか、そっちに大きなお金が必要なので、そっちを議論することが多いんですよね。

今聞いていると、すごく福井県の中で文化活動がされているというのが分かりますし、そのこと自体はすごくいいことだと思うんですけども、外から見ると全く入っていけない世界というか、わからないんですよ、全くね。

福井県の中の出来事として完結されているので、私が外から来て何を言ったらいいのかなというところで、全く発言することができない感じがしてしまっています。それは逆に言えば、福井県の中だけでこもって、中だけを見てクロードに文化政策を考えていこうとなさっているのかなという気がします。それだったら、本当に福井県の中だけで完結して、福井県の県民の税金を使ってやることだから、福井県の方が満足すればそれでいいのかもしれないんですけど、今文化というのは非常に都市の魅力を通じて都市間競争にあって、あるいは今度の小浜もそうですけれどもソフトパワーというふうな、そういう文化によってプレゼンスを高めるとか、そっちの方に非常に関心があって、多くの県の委員会とかに行くと、いかにして文化によってその都市の魅力を高め、発信力を強めていくかといったような話もされるわけですね。

そういう点でいくと、ここに網羅されているのってほとんど知られていなくて、東京近辺で見ると。それに比べて金沢の21世紀美術館というのは、おそらく私が委員で行っても非常に興味があって、全国発信力があるものだから、ああいうのはすごく話題になるわけですし、それから、金沢にはアンサンブル金沢というプロのオーケストラもあったりして、そういうふうな全国的にも興味があるものがあると思うんですけど、福井県で文化政策を考えていくときに、裾野が非常に広くて厚いということは分かったんですけど、全国的な発信力という点は全く考えずに、中の県民の文化活動だけを考えてやっていけばいいとお考えなのかどうか。

祖田座長

そうではないと思います。

後藤委員

そうですね。ただ、ここに書かれているのはほとんどそういうもので、あと、もう1つは、割りと活動のスタイルの拾い方が古いんですよね。それで、今の若い人たちがやっているような音楽、例えばヒップホップとかっていうのも結構古い部類になっちゃいましたけど、そういう若い人たちの文化というのがあんまり拾い上げられていない。

福井大学も県立大学もあるので、おそらく若い人たちがいろんなストリートダンスをやっていたりとか、そういう様々なことをやっていると思うんですけど、どっちかというところと大人か子どものところと偏っていて、若者のところを捉え切っていないんじゃないかなというのも少し思いました。だから、その2点です。

祖田座長

広部委員。今のその広がりについて何か。

広部委員

基本的なことになるんですけども、実は今、教育・文化創造会議という名称ですけども、教育の方はさっき知事からごあいさつで申し上げましたように、特に小・中の学力が国の全国学力テストによってある程度トップレベルというのが2年続けて一応実証された。それにプラスして、小・中学生の体力についても1位、2位ということで実証されたんですが、もう1つの柱であります文化の方について、今どういう国・県のレベルになっているか、それが実は私ども、はっきり言ってわからないわけですね。

人によっては、金沢よりずっと劣っているとかなんか言い方をしているわけですが、私たちは教育の方については昨年から全国のいろんなところから、逆に福井県の方へ視察にいろんな方がマスコミも含めて来られます。私たち、文化の方を、文化力といいますか、そういった指標があまり見当たらないわけですけども、福井県の文化の現状はどうか、さらに教育同様、文化を総

合的に高めていくにはどうしたらいいか、県外から見た福井の文化はどんな状態か、どうこれから進めていったらいいかと、いろんな諸課題についてお知恵をいただきたいということが基本でございます。

要するに私ども、いろいろ御提言いただいたことはすぐに実行に移す予算付けをして、そういった準備を今進めていこうというつもりでございまして、要するに総合的に福井の文化を高めていく、子どもたちにも文化を勉強してもらおうと、そういった手法であるとか、どんなことでもよろしく願います。

祖田座長

ということで、後藤委員、遠慮なさらずに広く御発言いただければと思います。よろしく願います。

丸山委員

今のお話で、私、名古屋ど真ん中祭りとかそういう話をしたのは、これは今日いただいたのはベースで、こういうことがあるんだということは、私も地元じゃないのでお聞かせ願えて、それにプラスアルファ、発信可能かどうか。いきなり発信するわけにいかないの、蓄積みたいなのになっているんですね。その萌芽があるかもしれないですね。

名古屋ど真ん中祭りというのは学生が始めたんですね。学生が始めて、今は結構、市が逆に乗って、それが観光とかにも結びついて、そういう意味では予算合意も必要なもので、それが新しい文化かどうかというのはまだ相対化できないから分かりませんが、そういう萌芽があるかどうかという話は今調べられて、今日いただいたのはこれまでの福井の蓄積あるいは活動があったということで僕も理解させてもらっているんですけども、そういうことですね。

西委員

だから、実際、そういうことを考える子どもたちがどうしたら出てくるかという話ですよ。我々が教育・文化という観点で考えるのは。

丸山委員

資料として、それで、後藤委員がおっしゃったように、やはり発信するならするなりの質みたいなものもあると思うんですね、期間もあると思うし、どういう戦略を練っていくのかということもあると思うんです。これは今後の話だと思うんですけども、ただ、萌芽があるのかなのかというのは私もちょっと知りたいなと思うんですけどね。

ちょうど座長が、委員長が福井県立大学の学長をされているので、福井県立大学というところは新しい大学で、そういう動きがあるのかなのかというのは是非。

祖田座長

学生たちのサークルがございまして。私どものところは学生数が約1,800で、サークルが60ぐらい確かあったと思います。小浜キャンパスも含めると70ぐらい。小浜キャンパス独特のサークルなんかもございまして、それを含めると全部で70ぐらいあるかなと思いますけども、さあ、そのうちの何が萌芽なのかと言われますと、ちょっと今にわかには答えかねるんですけども。

赤土委員

結局、学生が動かないと、若い人が動かないと、我々年寄りですけどもあんまり動けないので、逆に言ったらそういうものをうまく支援できるようなシステムといいますか、そういうものができる就非常によいのかなという気がするんですけど。

大廻委員

先日、福井大学医学部の教授と話をしておりまして、医学部の中で「言葉のもたらす健康」というテーマで今から1年、初年度から、言葉というものが医学にどう働きかけるのか、例えば笑いというものが医学とどう関連しているのか、そういったことを話しておられて大変興味を持ち

まして、福井大学の学長と近々懇談を行うことになっております。

それを踏まえて実は明日、ことば文化交流シンポジウムというのが愛知県の碧南市でございまして、ここには全国から相当数の方が、松山とか半田市、伊丹とか総勢数百名そろいまして、文化をどうとらえるか、それから、お互いの文化というものをどう発信するかということをやって、これで今回2回目なんです。3回目か4回目はどうしてもこの福井県でやってほしいと言われていたんですが、明日、精一杯福井の宣伝はしてこようと思っっているんですけども。

この間、総務省へ行ったときにお話をしてきましたが、都市間および大学とか市町村との競合において、文化もしくはそれに類するものをやる場合は相当額の補助を出しますよということをおっしゃいました。私は多分この中で唯一の市町の職員だと思うんですが、今非常に財政が厳しゅうございます。

坂井市も文化関係予算が大体半分に減らされてしまった。そういった中でどうやって文化を育成していくかとなると、産業観光都市になる、都市間で競合するか大学と連携するかですね。そういった様々なことさえ条件がかなえば、国が相当力を入れてくれるということらしいので、是非皆さん、そういう方向で福井県の文化というものをとらえる1つの視点にいただければと思います。

ちょうど明日も文化庁の人が福井の方に来ますので、文化庁の人にも聞いておきますので、次回報告させていただきます。

竹川委員

福井県文化協議会の中身を見てみますと、構成メンバーが、やはりここにいくつか書いてあったように非常に高齢化している。それから、もちろん高校生、大学生辺りの人はほとんど会議には来ていない。それから、実際に活動している子どもたち、例えば合唱とか吹奏楽、それはたくさんいます。会員ではありませんが、数としています。なぜ活動できるかといえば、やはり学校というのが基本になるんですね。学校の部活動というのが萌芽を育てているんです。大変裾野を育てている。

例えば、吹奏楽の人口が4,100人、去年は3,400人が音楽堂で一堂に会して演奏するというようなことがありました。それほど広いんです。それは、みんな学校の部活動が育てている。小学校、中学校、高校、大学、そして一般の部まであるんですね。それはどこで育てられたかという、学校なんです。きょうも学力、それから体力の話がありました。文化もちゃんと育てているんです、学校で。それをこれから未来に向けてどのように継続していくか。

また、音楽の部門で言えば、合唱、吹奏楽いろいろあったけども、室内楽、オーケストラ、その分野が育っていないんですね。それはなぜか。その人口が少ない、学校の中にそれを指導する人がいないということにまず起因しているんですね。

それから、管楽器は割りに早く吹けるんです。2、3年で吹けるようになるんです。中学校1年生の子が2年間で、入った子が2年間で、1年半と言ってもいいかもしれません。先日、ハーモニーホールでアンサンブルのコンテストがありました。県の大会がありました。今度2月8日に北陸大会、富山であります。全国大会も富山であります。福井県から代表が送られますが、その代表になった子どもたちの演奏は、これが1年半で吹けるようになるのかと思われるぐらい非常に芸術的にも高い演奏ができるんですが、ヴァイオリンなどいざ弦となりますと1年や2年ではできない。最低5年ぐらいはかかる。つまり学校でやるとなると、中高一貫してやっていかないと育たない。だから、そういうシステムを教育委員会としても県の施策として1つ考える方向があってもいいのではないかと。

そして、すばらしい音楽堂があるんですから、あそこは福井県の文化振興事業団というのがあってやっていますけれども、ああいう官と連携をしている場所があるんですから、練習場所があるんですから、そこで育て上げていくと、文化の目を育てていくというのもこの創造会議としては極めて重要な分野ではないかと思っましたので、ちょっと申し上げました。

長谷委員

今の関連ですけど、前回、高校の芸術教科の教員という話をしましたね。ところが、なかなか現実的に難しい部分もあるわけです。やはり3高校とか、地域ごとに芸術クラブの、まあ言うた

ら地域へ帰って割りと継続して学び合えるようなアメリカ的な、ああいうものをつくっていく必要がありますね。各校別にやるといってもお金もかかるし、経営するのも難しいですから、何かそういう地域ごとに3校を1つにするぐらいにして、そこへ放課後に行けばみんながやっているという芸術クラブのようなものを少し。音楽とか、わりとピアノ教室があったり、書道も塾は割りとあるんですね。美術なんか割りとないんですね。だから、そういうものも少し考えていく必要があるかなと思いますね。

本当は各高校に教員が配置されればベストですけど、なかなかできにくいときに3校に1人みみたいな形で、放課後にそこへ行って、生徒が来るのを待って、中・高が来て連続してみんなで学び合える、そういうものを、何か新しいものを考えていかなくてはという気がしますね。

それから、もう1つは、先ほど後藤委員さんが言われたんですが、僕の美術で言うと、「北荘・北美」なんかは正直言って毎年大学院の生徒が1、2人取材に来て、卒論とかに取り上げている。現代美術では、九州派とか、岐阜のVAVA派とか、本県の北美とかいうと具体美術と並んで4大前衛集団ですから、全国的にも結構プロには知れ渡っているわけですね。

今回、僕も熊本で個展をするとしたら、熊本で何でという話なんですが、同じ現代美術のメッカだからやるわけです。横浜ならトリエンナーレをやっているわけですけど、何かそういう伝統を生かして新しい現代美術のものを生み出していくというか、そして若者を引きつけていくというようなのも必要かなと思いますね。

それから、やはり小学校、中学生ぐらい対象だと、せっかく美術館があるんですから、無料バスを出すなりして美術館へ見に行けると、生の作品を見に行ける。

西委員

でも、回数が必要ですね。1、2回じゃなくて、普通の人よりも回数が多ければ多いほどいい。

長谷委員

多いほど鍛えられます。バスに常に無料で乗れるような、そういうようなものを美術館が開放していく。

西委員

ポイント制とかね。100回行ったら一応教育委員会からバッジをくれるでもいいですよ。何か目的がないと。ほんとうにこれは僕の経験なんですけれども、絵でも映画でも本でも、一般大衆と同じ量では勝てません。プロになれない。その何倍も何倍も目にして体験していかないと、プロになれませんよね。

長谷委員

それから、理科とか数学でもすごい教授とか先生を呼ぶと、やはり生徒は引きつけられるわけですよ、授業なんかでも。だから、芸術なんかもっと本物のアーティストを中央から招いて触れさせないと、子どもは目覚めていかないですね。

だから、もっと中央からプロを招へいしてくる事業をやってほしい。というのは、やっこのところ、福井県なんか教育長が努力されて、理科とかいろんな著名な人が来て魅力的な授業をされているわけですけど、芸術の面の本当のプロがどんどん来て触れていくというか、アウトリーチがなされていかないと生徒は感銘していかないとと思いますね。

西委員

それは、何というか、教師の問題でいろいろできないとおっしゃいましたが、大廻委員が事務局長をして僕が選考委員をしている「日本一短い『母』への手紙」、今年6万何千通来て、16年続いていますと、福井県が当然応募数は多いんですけども、客観的に見て福井のレベルはどんどん上がっているんですよ。

だから、文章力のレベルは福井、東京、大阪、これがずば抜けているんですよ。僕は福井県の生まれだから、ふるさと大使だからえこひいきで選ばなくちゃいけないのかなとはちょっとはあ

ったんですけど、じゃなくて、福井をとり過ぎるんじゃないかと選考会でもめるぐらい福井のレベルが高まっているんです、年々。この16年の積み重ね、それはだから小学校の低学年でもうまい。8歳とかで驚くようなのがいるんですけど、その子たちは8年間やってきたわけじゃなく、今年初めて書いたりしている子なんですけども、福井の中に手紙文化というものができちゃっているんです、雰囲気。その中に生まれ育った子は、坊主お経を読むじゃないですけど、そういう要素はあると思うんですね。それは、だから、学校単位で先生たちが手紙を応募するから書きなさいというのがあります、当然。でも、それ以外も含めてレベルは上がってきていると思います。

瀬尾委員

先ほど、中央からプロを呼んで子どもたちに教育というか、指導じゃなくて見せるという、これは大切だと思いますし、賛成します。

県外に、福井県出身の人が東京とかで頑張っている人もOBでたくさんおられますので、その人たちに是非ふるさとでやってくれと。学校内でね。学校訪問、今たくさんやっておりますから、それも利用してすべきだと。

西委員

していますよね。だから、もっと回数を増やすべき。

瀬尾委員

そうですね。敦賀高校の100年のときですかね、OBが26歳のときにアメリカへ行って、結局新しいダンスを今やって東京で広めているんだと言って一生懸命講演で話していましたし、そういった人がもっとたくさんいると思いますので、そここのところを把握して県内で広めてもらうような、そういったことも考えていくべきだと思います。

竹川委員

先ほどのことにちょっと付け加えさせていただきます。また、学力・体力の話になったりしますが、全国の駅伝でのこの間の福井県の順位は20位と16位だった。今までにない結果を出しました。つまりスポーツ関係でも、80万人の人口の割には優れた力を発揮しているんですね。

その背景は何かというと、僕の感想ですが、まず学力について言えばそれはきめ細かい人員を増やしているんですね、少人数学級というので。各教室できめ細かな教育がなされている。少人数だと、笑顔プランというタイトルでやっていますね。それがまず要因の1つ。体力にしても、県にはスポーツ保健課というのがありますが、学校の教員が何人もスポーツ課の中に配属されているんですね。そして、現場と行政とのパイプ役になって円滑に行われているというのが大きな要因だと思う。

ところで、文化課には学校サイド、教員がいるかと言えばゼロですね。ですから、そこへ何人かの教員を配属して、現場と学校や一般社会や文化団体とのパイプ役になってやれると、もっと隅々まで施策が行くのではないかというような気がしてなりません。

今も優れた文化課の方がいらっしゃいますけど、またいろいろ調査をしてピックアップしてやってほしいと言われても、限られた人数の中で僕はそれは無理だと思うんです、はっきり言って。人材を増やさなければ。先ほど教育の成果が上がったように、文化面でも成果を上げるには人ですよ。

人・物・金という話がありました、人から人、それをこの文化の会議では一番強調していくべきだと私は思います。

赤土委員

福井は学力が高いとか、スポーツ力がすごくいいとかいうんですが、遊ぶところがないんですね。遊ぶところがなく、勉強しかすることがないから塾に行かせるんですね。でも、それをやることによって文化的な感覚というのがなくなっているんですよ。だから、いろんなものを見ていくという力がなくなっている。与えられたことだけやっている。だから、外へ出たときってみんな

なだめなんですわね。

埼玉なんか私も、1週間に2回は行っています。常時週5日間ぐらい日本全国を飛んで歩いていまして、その中でいろいろ見ているんですが、遊ぶところがあるんですね、たくさん。でも、福井はほんとうに遊ぶところがない。これだけ遊ぶところがないと、悪をするところもないんですね。昔の私たちの時代というのは、もっともっと悪をする場所がたくさんあったんですよ。そういうことからやはり文化というのは育っていくんじゃないかなと思います。

福井の人間をもっと外へ出しても、若い子は出してもいいと思うんですよ。それにお金をバンバンかけて、小学生、中学生でもいいから常時ローテーションで次々回して戻ってきていろんな話をする。それから、向こうからも来てもらって話をするということぐらいやってもいいかなというふうに思います。

お金は親が出せばいいです。これは、役所で金を出させようなんていう感覚は絶対だめだと思うんです。自分で金を使わなかったら、文化というのはよくなりません。育たないんです。今まで金沢であろうが何であろうが、ちゃんと自分のところで稼いで、自分たちで育てていったんです。それを、国や県へ頼んで子どもたちを育ててくださいということ自体が間違っている。私はそう思います。だから、金も使えばいい。使わせないとだめ。金のあるところに初めて文化は育つというふうに私はいつも思っています。

佐野委員

AOSSAの3階あたりにたまっていたり。

赤土委員

そうそう、あれはワルしているようなところなので、もっと例えば街の中へ出ると、そこで路上で音楽をやっているとか、いろんなところがあってもいい。それから、奨学生、中学生は無理ですけども、大学生だったらもっと飲み歩くような場所もたくさんあってもいい。

老人会の集まるようなところじゃなくて、もっと若い人たちが集まってくるようなそういう場所があってもいいんじゃないかというふうに思いますね。八王子なんて、駅前へ行くと若い人がうようよとしているんですね。

西委員

あそこは大学生があまりにも多過ぎますからね。

赤土委員

多いからなんですけども、でも、それぐらいの感覚が福井でできるかということ、これは無理です。それから、福井大学、工大とか県立大学、みんなすごくまじめ、いい子なんです、表向き。

丸山委員

いや、いい子がいたほうがいいと思っていますよ。

赤土委員

いい子はいいんですが、そういう羽目を外すような人間がいなかったら、町はよくなりません。

丸山委員

ただ、僕は、東京とかああいうところの文化をまねをする必要が全くないと思っていますので、だから、もうちょっと先に言えば、やはりその地元の資産みたいなものが生かせるような中で子どもたちが育てばいいと思うんですよ。

新しくこんなん持ってきても定着しないんですから。そういう意味では後で出てきますような文化財があって、それから町並みができて、そういうものが子どもたちが育つ中でだんだん自分自身の感性の絵が磨けるようなものが、僕はそれが理想だと思うんです。

おっしゃるようなことは筑波大学で昔ありましたけども、あそこは何もなくて、飲み屋街をわ

ざわざつかったという話があって、自殺者が多くて、学生とか先生のストレスがたまると、そういうような1つの別世界みたいなものは今もあると思うんですけどね、どこでも福井でも各都市には。学生が、行く、行かないだけだと思っているんですけども。

赤土委員

筑波辺りはすごく今元気になりまして、町もすごく大きくなってきたんですけども、福井の方はやはり人が集まらないですよ。これは福井と都市部と同じにしてもだめなんです。83万という人間が福井県全部なんですね。でも、千葉県だったら千葉市だけで83万人なんですよ。そこと同じ勝負をしようたって無理なんです。

だから、その中で福井でやれることが何なのかということを見つけていかないとだめ。それを今やるのがこの会議じゃないかなと思っていますので、細かいことをつついたってしようがないので、全体で何ができるか、みんなにどういう夢を与えられるかということをやはりやってみないとだめだと私は思います。

長谷委員

福井に文化施設がたくさんありますね。たくさんあると思うんですよ。美術館も恐竜博物館も全部ね、歴史博物館も一通りそろっていますよね。

長谷委員

うん、たくさんあるから、もっとそれを生かしていくというかね、子どものために。

シカゴ美術館に行ったとき、「グランド・ジャット島の日曜日の午後」というスーラの作品があるんですが、それが1点ありますと、前にいすが30ぐらい並んでいて、入れ代わり立ち代わり団体で生徒たちが来て座るんですよ。そして学芸員が授業をするわけですね。授業というか鑑賞会を20分単位ぐらいで行う。聞いたら、シカゴ市内の小学生が、3年生になったら毎年それを味わうとか決まってやっているわけですね。

福井県もとてもいい作品もたくさんあるんですが、卒業までにそれを見ているかといったら見ていないわけですね。だから、何とか今ある施設をそういうようなかたちで、学芸員にもっと生きたかたちで活躍してもらって、生徒たちが触れていくということをまず1つはやらないと。

西委員

そういうパターンも含み、恐竜博物館なんかも非常によくできていて、例えば悪いんですけど、おもちゃを与えて、そのおもちゃの使い方、遊び方が下手だということですよ。だから、その使い方のいろいろ工夫は必要になるのかなと思うんです。

恐竜博物館はすばらしい建物で、あそこで化石を掘って、出てきたら持って帰っていいよという、そういう遊び心があるからリターンして人がいっぱい来ますよね。あれはできたばかりのとき、以前「21世紀の福井を考える会議」のメンバーで視察しなくちゃいけなくて、物申す方々ばかりで行って、みんなでどうアラを探そうかという状況だったんですが、誰一人文句をつけませんでしたよね。だから、それぐらいいいものがあるわけで、あれは稼働率もいいと思うので、大成功だと思うんです。ただ、県外の人間のアクセスが悪くて、知名度が低くて来ないという欠点があります。この前も県立博物館に行ってみせていただいたんですが、昭和のまちづくりなんていうのは非常にいいと思うんです。あれをもっと広めていくと、あそこはやはり聞くと県内の人間はリピートして見に行くという話を聞いていますし、あれがどんどん広がっていく要素があると遊び心が増えてくる。あの中にもいろいろ文化があるので、つくるだけじゃなくて、おもちゃでどうやって遊ぶのか、こちらが考えたのと違う考え方をするのが子どもたちだと思うので、そういうこともあると思います。

広部委員

恐竜の話がされたんですが、後藤委員は御存じないかもしれませんが、実は今、恐竜博物館は非常に見学者・入館者が伸びておりまして、現在は年間40万人近く、約40万人、ほとんど7割、8割は県外からですけどね。ただ、関東方面からが少ない。それが今悩みの種ですが。

西委員

100万人来ますよ。大変だと思うけど。

佐野委員

今、子どもの遊び場の問題が出ましたけども、確かに遊び場がないので町内で数少ない子どもがどこにいるのかなと思って調べると、毎日、帰ってきたら児童館で本を読んだり、結構遊んでいるんですよ、いろんなゲームをしたりして。家へ帰ってもいないということもあるんでしょうけど、日常的には児童館へ集まってきて、その児童館の数なんか大分あるんでしょうね。結構地域にありますから、そこで遊んでいます。それで、週末になると地域社会の町内会とかいろんなリーダーシップで里山探検隊とかやっていくと、結構いろんなところから子どもたちが集まってきて、焼き芋などいろいろやっているんです。

昔は、遊ぶところがなかったもので、お宮さんの境内とかいろいろ空地で、それから小川とか自然相手に結構遊べたんですが、今はコンクリートに用水路でしょ。川へも入れられないし。ちょっと遊び方が違うというのか、それはあると思います。

それから、先ほど後藤委員の方から出されたのは、問題提起された発信力。これは大事だと思います。例えば金沢と比べると、21世紀美術館やら音楽堂があって、去年からラ・フォル・ジュルネの東京に次いでこちらでもコンサートとかいろいろやっているんですよ。そういう意味で、これはないものねだりしてもいけないので、あそこは観光都市の古いところだし、震災にも遭っていないところだからこれはこれでいいんですけれども、福井は金沢を真似しなくてはいけないこともないと思うんですよ。また、財政的にもできないだろうしね。

不思議なのは、あそこで新人の登竜門コンサートを毎年やっているんですが、福井の方が登竜門に出るんですよ。10人か20人、北陸3県で予選して、それで決勝で残って、本選でヴァイオリンを弾いたりするのは、3人のうち2人は福井が入っているんですよ。中・高校生で、最近の5、6年の傾向としては福井の子ばかり入っているんです。ということは、その子たちに聞くと、親がやはり金を使って外国へ、リスト音楽院とかあちこちやっている。父兄がこれだけ豊かだと思えますね。

それで、今説明のあった美術分野も、この分野からそういう人間が出ていくなんで全然関係ないんですよ。ここの今のリストアップした芸術分野から。

文学の部分でも、福井在住の築山桂さんの原作で、NHKで緒形洪庵を扱ったシリーズもので始まった歴史小説とか、ホラーの雀野日名子さん、それから、推理小説の横溝正史賞をとった桂美人さんとか。また、男性では、舞城王太郎が今庄の人らしいが三島由紀夫賞を受賞したり、結局、福井の文学活動と関係なく、卒業して向こうへ行って。

ただ、子どものときに手紙文化とかそういうところにかかわってきているんですね。それで、書道も結構活躍している人がいるんですよ。書道のコンクールに出していたりする。だから、芸術文化の振興というのは作家まで育てる必要はないので、刺激を受けて何かやる気の起こる若い世代が育っていく。そういう意味では、地元の文化を振興していくのがベースにはなっているのかなという思いはします。先ほど出たように、いろんな分野で活躍している人を呼んで、刺激を与えて交流するのは大事なかなと思います。

祖田座長

ありがとうございます。もう第2の論点のところで大分時間をとってしましまして、残り2つあるんですけど、4つ目は時間がなければいいですよという話を聞いておりますので、第3点のほうに入らなきゃいけません、ただ今出たのはやはりもう少し広がり欲しいなというようなこととか、それから、若者が実際に何か新しい目を持って活動しているのかどうかというのは私自身も含めまして、もう少しそういう目を持って学生の動きを見なきゃいけないなと思いました。

それから、同時に小学校、中学校、高校のクラブ活動なんかも詳細に見れば、やはり子どもたちの嗜好とか文化というものについての芽なんかも見えてくるんじゃないかと思っておりますので、こういった点も将来のことを考えますと注意をする必要があるなと思いました。

もう1つ、きょうは話が出ておりませんが、数年前に全国の文化の交流の場を持ちました。国民文化祭といったものが、いわば全国からいろんな踊りなんかも含めてありとあらゆる文化活動の方が集まっているいろんな催しをされたわけで、こういったものがどういう効果を持っているのかなということも、先ほど来お聞きしてまいりました。

いろいろ、その育つ土壌の問題と、それからやがて花開いてくるものとの関係、そういったことをやはり注意深く見つめる必要があるかなと思われました。

大変中途半端な議論になったかと思えますけども、少なくとももう1つの論点につきましてご議論いただかなきゃいけないと思えますので、次の論点につきましては、文化財の保存と活用という点でご議論いただきたいと思えますが、まず事務局のほうから資料が提出されておりますので、ご説明をお願いいたします。

文化財保護室長

それでは、お手元の資料に従い、「国・県指定文化財一覧」をご説明します。資料3をご覧ください。

< 資料3に基づき説明 >

祖田座長

ありがとうございました。では、ただいまの説明等に基づきまして、文化財の保存と活用につきまして御議論いただきたいと思えます。

西委員

世界遺産について重要なものはないですか。認定中とか。

文化財保護室長

世界遺産でございまして、小浜市が単体で申請をしたいということで、それから、石川県、岐阜県と本県と当該市町村を合わせまして白山のところを出しましたけれども、選に漏れまして、候補の資産として今後も資産価値を高めていきたいということで、今かなり資産価値を整えるような作業を行っている。

祖田座長

ありがとうございました。では、どなたからでも。

後藤委員

2つぐらい言いたいことがあるんですけども。

1つは、この文化財と先ほどの現代アートというのは割りと切り離して考えられていたのが今までだと思うんですけども、実は文化財とか、それから工芸美術が現代アートにとっても非常に意味のあるものとして使われるケースがあって、私が存じ上げているアーティストというか、和紙を使っているいろいろなものをつくれる堀佳子さんって京都で活動しているんですけども、彼女が使っているのは越前和紙です。10人ぐらいで漉いて、首相官邸とか成田空港の第1空港のほうの到着ロビーの明かりを覆っていたりとか、そういうことで越前和紙の職人さんと組んで仕事をされているということで、こういう工芸美術とか文化財というのも現代アートと結びつけていくという視点を取り入れていくと、もっと活用の仕方があると思うんですね。

いわゆる文化財の活用というと、何か文化財を飾って博物館の中で見せるというのがものすごく古いやり方ですよ。それが外へ出ていって空間に広がったのが伝建地区（伝統的建造物群保存地区）だと思うんですけど、それがさらに広がって、今度は景観というふうにはなっているんですけど、そうじゃなくて、もうちょっと現代アートの創造そのものをつなげていくような。美術として生かせる。

例えば、漆1つにしても、ただ伝統的に職人さんが塗っているのとアーティストが素材として

つくるというのを全く違うので、そういう現代アートとか、あるいは現代的な産業として使っていくということもできると思うんですけども。

西委員

それはやっているんですよ、実際。越前漆器なんかにしても、世界中のブランドの商品をつくっていたり。越前和紙にしてもそうですし、根本的に岩野市兵衛さんがつくるものというのは版画とか絵に塗るためのものですし、さっき言った彼女も越前市で紙を漉いているわけですが、これは県もみんな知っていることだと思います。

長谷委員

紙も今立紙展とか、御存じやと思います。紙を使つての現代アートがそこから発信されています。

西委員

越前焼きもそうだし、和紙もいろいろやっています。それは国内だけじゃなく海外のデザイナーであるとかアーティストも参加している人がいますし、眼鏡なんていうのは工業製品かもしれないけども、文化でもあって、世界一の眼鏡をつくっている福井県のデザインというのは、ペイリン女史もそうけども、あのデザインしたのも福井出身のデザイナーですよ。今大阪にいらっしゃる。

赤土委員

川崎さん。

西委員

ええ。そういう部分がいろいろと広がってはいます。

後藤委員

ただ、地域経済学会で、鯖江の眼鏡産業を地域経済として分析した方の発表を聞いたことがあるんですけど、デザイン力が弱いので、非常に中国との競争に負けるという。

西委員

それは福井県の全部です。例えば悪いんですけど、仏像を彫るのみをつくる力、彫る技術というのはすばらしいけども、仏像の形にして魂を入れる力は弱いということなんです。それは物をつくること、前回もそういう話をしていたんですね。

だから、そういうのをどうしたらいいのか。それで、若者という下のところから育てていかないと、3歳で決まっちゃうところもあるので。

後藤委員

それで、そのとき鯖江の産地の調査をした地域経済の方に聞いたときに、「何でそんなにデザインが悪いんですか」と聞いたら、産地としてデザイナーを3人しか抱えていないと言うんですよ。やはりデザインが重要だということが、具体的に政策として多分サポートされていないと思うんですね。イタリアが何で強いかといったら、ものすごくデザイナーとつくっているところの人の結びつきが強いわけですね。

西委員

でも、イタリアのデザイナーがデザインしたやつを鯖江でつくっているんですよ。

後藤委員

だから、鯖江にもし日本人のデザイナーがいれば。

西委員

それはやはり鯖江だけで活動できないから、出て行って各地であれしたりしているわけで。

後藤委員

産地がもっとデザインを重視してそっちに投資をすれば、もうちょっとデザイナーが。

西委員

うん、それは前から言っていて、それは3割はそれをつくらないと負けていくだろうと思います。あとは、大手から委託を受けてつくるといふこともしなければ産業として成り立たない。それは繊維をつくらせても日本一だと思うんですけど、福井から高名なデザイナーが出ているかという、そうではないですよ。それで負けている部分もあるわけで、それは、そういう部分でどういう人たちをどうしたらそういうのが出てくるかねという話をしている。

広部委員

伝統工芸と今おっしゃるような現代アートとを結びつけているような全国の代表的な事例って、どこか御存じはないですか。

後藤委員

金沢なんかは割りとうまくやっているみたいですが。結構アーティストも。あそこは金沢大学もありますから、あそこから出ていっているし、それから、京都もそうだと思いますよ。

だから、京都と金沢に挟まれていて、なぜそういうふうにならないのかなというのが私は不思議ですけど。

西委員

どっちかに行ってしまうんですよ。

後藤委員

それは、なぜ行っちゃうかということですよ。

西委員

マーケットも弱いからです。

丸山委員

でも、やはり伝統や職人さんって非常に重要だと思っているんですよ。デザイナーというのは本当に特殊な人で、すべての人がなれるわけじゃなくて、一番重要なのはそういう職人さんが食っていけるものをちゃんとつくってやらないと、若い人が入っていけないですね。

だから、先ほど言った1つのプライドというのは、職人になってそれが一生やっていって食っていて、将来的には人間国宝になる、そういうような土壌をつくっていかなければならないので、僕はデザイナーをつくる必要は全くないと思うんですよ。だから、つくらなくてもそれは現れてくるんですよ、才能がある人が。

でも、今、京都とおっしゃったけども京都のアーティストは極わずかですね。職人さんがいなくなると、そういうものがつくれなくなってくると、悪循環に絶対なんです。普通の小・中・高へ行っていたら、芸術家にはなれても、怪しい芸術家が多いですけども、本当の職人ってなかなかできていないんですね。その層をどうするのかというのは京都でも問題になっていまして、金沢は今のところ何とかやっていますけども、金沢の漆のほうはるかに京都より上ですよ、技術的には。僕、そう思っているんですよ。長い目で見て。でも、その人たちが食っていけるかどうかといいますとね。

後藤委員

だから、その職人さんが食べていくためにも、デザインが付加価値になっているわけですよ。

丸山委員

そうです。

後藤委員

だから、デザイナーと職人さんがコラボレーションするということが大事で、私は職人だけが大事とかデザイナーだけが大事という話をしているんじゃないで、コラボレーションしていかにかに付加価値を高めるかということがないと両方が食べていけないようにならないわけで、そういうことが仕組みとして非常に大事という政策をとるかどうかなだと思っんですよね。

赤土委員

福井のデザイナーというのは、ものすごくデザイン料が安いんですよ。やはりそういうものに対するお金のかけ方というのは全然違うんですね。私は建築をやっている、福井でやるのと私らの都会でやっているのと大体3倍から4倍違うんですね、設計料一つでも。それぐらい違う。

だから、デザインで食べていこうと思っても、これはちょっと難しいんじゃないか。ポスター1枚のデザイン料が、30万円、50万円いただきますと言ったら、それが高いと言われるんですね。私の友達なんかは東京でやっていて、ちょっとデザインをやりますと大体1,000万円なんです、ポスター1枚のデザイン料が。それぐらい桁違いに違う。

だから、やはりこれは福井の県から出す仕事とかそういうときなんかでも、デザイン関係に対しても、それから職人さんのやる仕事に対してもお金を出さないとだめなんです。これを出さないから、みんな外へ出ていってしまう。食べていかないとだめですから。それで福井のデザイナーが育たない。だから、川崎君なんかも向こうへ行って結構頑張っています。それから、戸田正寿君なんかも、この前の洞爺湖サミットのプロデュースをやったりしていても、そのデザイン料でも結構稼いでいる。

だから、そういうことで、福井ではそれが食べていかれないというのが一番きつんじゃないか。金沢だとか京都の方がそういうものは高いです。その辺から入っていても1つのデザイナーを育てていく意味ではいいと思うんですが、まず、たかが紙や鉛筆でやっていることにそんな金を出せるかというのが福井の人の基本的な考え方。

西委員

それは名前が売れているからもらえるだけの話で、全国どこへ行ってもそうです、それは。誰もが1,000万円もらえるわけじゃないから、それは。

赤土委員

もちろんそうですが、全体の金額の出し方が違う。

西委員

それは違うというのはよく分かる。売れている人であればそれを出しますよ。

赤土委員

いや、売れる前にです。

西委員

売れる前はどこだって出してくれないですよ。

赤土委員

県の総合美術展、私も15年間ずっと事務局長をやっています、知事賞の賞金がやっと5万円までいったんですが、今ゼロなんですね。そういうものに金を出す必要がないという感覚なんです。だから、この辺もやはり皆を育てるためには、そういうことには出していてもいいんじゃないかなという気はします。

祖田座長

議論も尽きないところなんですけども、前の項目ですっかり時間をとってしまいました。この第3項目が不十分なばかりか、第4項目には全く触れずじまいというふうなことになります。もっとも、第4項目につきましてはその前の議論にも大変多く含まれておった点でございます、また今後深めていただければと思っております。

大変中途半端になってしまいましたけども、時間が参りましたのでこれで切り上げたいと思いますが、今後ともまた今日の不足分を補っていただくと同時に、電話、ファクスあるいは書面で、この間はこういうことを言わなかったけども、こういうことに気がついたというふうなこともまた別途御指摘いただければ、大変事務局としてはありがたいと思います。

では、事務局の方にお返しさせていただきます。

教育政策課長

どうも貴重な御意見をありがとうございました。

いろいろと御意見がありましたように、議論の進め方としてある程度まとまりが必要なと思うんですけど、一応1回目、2回目につきましてあまり事務局の方で誘導ということになってはと、御審議いただく中で方向性を少し見ていこうということでもやらせていただきましたので、御了承いただきたいと思えます。

3回目以降につきましては、ある程度論点みたいなものを整理させていただいた上で御議論いただくような形をとらせていただこうと思っておりますので、これについてまた御意見をお出しいただきたいと思っております。

本日の議事録につきましては、また事務局で清書いたしまして、ホームページにも載せていくこととなります。その点はどうか御了承をいただきたいと思っております。

今後の会議スケジュールでございますけれども、また改めて日程調整の御紹介をさせていただきます、その中でまた詰めていきたいと思っております。できれば年度中にもう1回できればなと思っておるんですけども、その点、また御協力をお願いしたいと思います。

それでは、第2回会議につきましてはこれで閉会とさせていただきます。ありがとうございました。

以 上